

## 働きやすい環境づくりで、勤務医確保

対談者：桑島 昭文 長野県衛生部 部長  
鳥海 宏 同 医療政策課・医師確保対策室長  
中谷 俊禎 同 主任  
聞き手：鈴木 信夫 めのはな同窓会広報担当常任理事

鈴木：長野県衛生部の桑島昭文部長（写真中央）  
医師確保対策室の鳥海宏室長（同前列右2人目）  
同対策室職員の方々がインタビューに応じて頂き有難うございます。実は、今の医療混乱を解決する新しい芽がないかと取材活動をしています。今回、千葉大学医学部同窓会である「信州めのはな会」を通じながら、長野県立の須坂病院や子ども病院などの取材をさせて頂きました。それぞれの医師が非常に生甲斐を持って医療活動に従事していることが、その過程で分かりました。一方、長野県の場合、『山と渓谷』という雑誌を使って医師募集を企画していることが分かりました。そこで、他の地方公共団体へも示唆できるような医療改革の芽があると考え、長野県衛生部医療政策課・医師確保対策室を紹介すべく伺った次第です。まず、医師確保対策室の概要を紹介して下さい。



桑島：当室は、平成20（2008）年2月に対策係から対策室に組織換えし、職員も4人から7人に増員されました。その結果、どんなことが良くなったかをお伝えします。知事からは、医師確保について充分取組むように指示が出されていましたが、当初、動きが充分ではなかったと思います。職員が増員された段階で、医師個人へのことこまかな訪問などにより、きめ細かい対応が出来るようになりました。転職される医師のお子さんの保育園、医師の住居なども含めた対応が可能になりました。地域医療を共に考えるシンポジウム、職場へ復帰するための研修など、事業の幅が広がりました。かなり充実した医師確保の取り組みが行えるようになって、医師確保対策室へ組織換えした効果と思っています。

鈴木：これまでの取材では、長野県という環境に魅力を感じた多くの医師が生き生きと活動していることが分かりました。環境面で何か工夫していることがありましたら紹介して下さい。

桑島：今までは、医療関係の色々な雑誌に募集広告を出していましたが。前衛生部長は山好きで、私の趣味も登山。お互いに長野の山に登っていたことが、医師募集広告を『山と渓谷』に出すキッカケになりました。知事室で医師確保対策を協議しているなかで、山好きの医師は沢山いるのではないかとの話になり、医師募集広告を掲載しました。募集広告には色んなアイデアが職員から出されましたが、長野県の実情、山や食べ物の特徴を訴えてはとの議論を経て、広告を掲載した結果が今に至っているところです。

鳥海：長野県の特徴をもう少し宣伝します。県認定のワインがあります。味を堪能しても

らえるものを他にも沢山準備していますので、全国から多くの先生に長野県へ来て頂き、美味しいものを食べて頂きたいと思います。

鈴木：ワイン好きの先生は、おおいに歓迎、長野へどうぞ、ですね。ところで、1例ですが、佐久総合病院から東京へ転職した浅野克則先生は、軽井沢町国民健康保険・軽井沢病院の医師募集のパンフレットを東京で見て信州へ戻っています。そこで、医師募集パンフレットを作成して医師を確保する対策予算などの概要を紹介して下さい。

桑島：平成 21 (2009) 年度の医師確保当初予算は概ね 5 億円、内訳は、即戦力の医師を集めるための医師確保対策の充実に 3 億円、産科や小児科の特定医療分野の医師確保に 1 億 8 千万円、医師の職場環境改善が 1 千万円です。

鈴木：医師確保対策として、医学生を対象にした奨学金制度の工夫がなされていることが話題になっています。入学者を対象にして奨学資金を提供する、大学が所在している自治体と都道府県とが協議して提供するなど、支給対象を限定したものとなっていますが、長野県の特徴はありますか。

桑島：平成 18 (2006) 年度から臨床研修医研修資金貸与をしています。長野県民であるとか、信州大学生であることに限定はしていませんし、新入生でも対象になります。要約すると、出身地、大学、入学年度とは無関係です。現在の対象者は 53 人おりません。大学別には、信州大学生 21、県外の大学生 32 人。入学年度別では、1 年生 12 人、2 年生 12 人、3 年生 10 人、4 年生 9 人、5 年生 4 人、6 年生 6 人ですから、かなり広いレンジの事業になっています。これは、本県の修学資金制度の特徴です。支給額は、月額 20 万円です。支給期間の 1.5 倍に相当する期間は、当県が指定する医療機関へ勤務する条件が付きます。平成 21 年度からの事業になりますが、臨床研修医を対象にした修学資金貸与と制度を設けています。産科、小児科、麻酔科の研修医に 2 年間、月額 20 万円の研修資金を貸与します。現在、産科医 2 人、小児科医 1 人に貸与しています。

鈴木：自治体によっては、ドクターバンク制度は諦めているように感じられます。本県では、どのような努力をなされていますか。

桑島：現在 34 人の医師が県外から来ています。医師確保対策室の職員数が充実しましたので、個別の医師に対して、こと細かい支援をしています。職員から具体的な事例を紹介させてもらいます。

中嶋：ドクターバンク担当の中嶋でございます。先生からこちらへ問い合わせがあった時には、出来るだけスピーディに対応する、誠意を持って信頼関係をつくることに心掛けています。個人情報の保護が大きな課題ですので、履歴書や個人情報を病院へ提供するに当たっては、必ず先生のご了解を得てから提供するようにしています。また着任していただくまでは、こちらに責任がありますので、例えば、引越しの依頼があった時はお手伝いをしたり、年度途中での保育園や幼稚園への入園は難しいので、教育委員会こども支援課と連絡を取り合って善処しています。転職される先生のご要望をしっかりと把握することが大事だと考えていますので、先日は、長崎へも面談に出向きました。

鈴木：私達の取材を通じて、何かの不便を感じている医師はおりませんでした。今の話し以外にも色々な努力話があるかと思しますので、ご紹介下さい。

桑島：それじゃあ、1人一言ずつ。

鳥海：医師対策室長の鳥海です。長野県内へ勤務を希望される場合の病院の条件、勤務体系や給与などの要望を聞いて、それに応えられるよう努力して折衝・調整をしますが、それだけでは不十分です。先生の価値観、一緒に来られるご家族の意見や生活面からの要望がありますので、それらにマッチ出来るような条件を提案しています。長野県は大きな県ですから、中央西線沿いだと、松本から名古屋までは2時間ほどで、中央東線沿いだと、松本方面から新宿へは2時間ほどで出られます。長野からだと東京へは1時間30分ほどで行けますので、そういった地域的な要素を含めて、長野県へ来られる先生に情報を提供できればと考えています。

内田：課長補佐・企画調整班長の内田雅啓です。相手の立場に立って考えることが非常に大事だと思います。私共は、自分達がして貰いたいことを相手にしてあげますが、その逆はやらないことをモットーにした医師確保対策を推進しています。きめ細やかな対応をして喜んで頂きたいとの思いからです。医師には、色々な注文があるかと思えます。それに対しては、ドクターバンクのコーディネーターを中心に、長野県内へ来て頂きたいとの気持を持って、誠心誠意対応させていただきます。先程、長崎へ面談に行った話がありました。そのような要請の際には、全国どこへでもお邪魔してお話を伺って、長野県内の病院へ来て頂きたいと願って対応しております。

鈴木：関連する例ですが、東京から軽井沢病院へ転職した麻酔科医の希望はペインクリニックの開設でした。それに対して、病院長が快く引き受けてくれたので、その麻酔専門の先生は軽井沢へ転職を決めた、との話がありました。

水上：水上俊治です。ホームページの管理・運営を担当しています。先ず、長野県が「長野県ドクターバンク（医師無料職業紹介）」をやっていることを、医師の皆さんに知ってもらうことが大事です。平成19（2006）年度からホームページに力を入れ始めましたが、最初は医師の方々に浸透させるのに苦労をしました。出来るだけ新しい情報を医師の方々が見やすくして提供するようにしました。『山と溪谷』のように、今までは私達の情報が届かない医師へも情報発信するように心掛けています。先程、部長が説明された「医師研究資金」「後期研修医研修奨励金」や「女性医師復職支援研修事業」は、Web site 信州（長野県公式ホームページ）の「長野県ドクターバンク」で公開していますので、是非、ご覧下さい。

鈴木：軽井沢病院の医師募集パンフレットが東京にありましたが、長野県内の医師募集パンフレットもありますか。

鳥海：長野県東京事務所（東京都千代田区平河町2-6-3 都道府県会館12階）に置いてあります。長野県観光情報センターにもあります。

中谷：中谷俊禎と申します。医師が働きやすい病院づくりに係わる事業に携わっています。女性医師の保育所問題や短時間正規雇用制度なども徐々に整備して、病院を支援する動きをしておりますので、長野県内の病院へお越し頂けることを切望します。

鳥海：長野県内には千葉大学医学部出身の先生が大勢おられます。色んな大学の医学部出身者も多くいますし、信州大学医学部の学生も出身は多岐に亘っています。そういった意味では、特定大学にこだわることなく医師を大事にする雰囲気濃い土地柄です。是非、長野県内へお越し頂けると本望です。

鈴木：先日、県立須坂病院を取材した際、母校が熱帯病などの感染症に強いので須坂でも

感染症に力をいれていると長崎大学医学部出身の齊藤博病院長がおっしゃっていました。千葉大医学部は真菌による感染症を研究していますので、長崎大学と千葉大学の出身医師が合体して、須坂病院の感染症対策が充実されるといいなと個人的には思いました。

ところで、長野県が努力して色々な医師確保対策を実施しても、現在発生している医療の混乱には、地方自治体レベルだけでは解決しない問題があるかと推察します。そこで、医師確保対策を推進してこられた長野県衛生部長の立場から、国レベルで行うべき政策・対策や都道府県レベルでもこのような連携があったら、という示唆をお願いします。

桑島：私共へも色々なご意見を頂戴していますし、国へも言わねばならないことがあります。医療全体の財政を充実させることが第一であると考えています。国の財政の中では、医療費の自然増を毎年 2200 億円削減する方針です。この方針が地域医療を圧迫していますので、医療に関する財源を確保することは、大きな、大きなテーマです。細かい話になりますが、地域医療における医師不足は、小児科、産科、麻酔科が顕著ですから、そういう特定の診療科へ医師を誘導することが制度的に出来ないのかな、そういう政策が必要であると思います。それから、勤務医が働く病院の環境をいかに良くするか、病院から診療所へシフトすることが起らないようにすることです。要するに、勤務医の働く環境を整備する、産科、小児科の医療体制を構築することを、しっかり実施して頂きたい。この 2 点は、申し上げたい。

鈴木：貴重なご提言を、また、医療問題解決へのご示唆を頂き、有難うございます。最後になりますので、長野県医療対策課・医師確保対策室として更に発信したいことがありますら補充をお願いします。

桑島：県外から転職されて長野県内にいらっしゃった勤務医が 34 人おられるのは、医師確保対策室職員の努力の成果とは思いますが、人口 10 万人単位でみると少し遅れを取っています。多くの先生方が長野県に来て頂けるような環境整備をこれからも積極的に促進していきますので、全国の先生に長野県へお越し願いたいと切に願っているところです。

鈴木：今日は、貴重なお時間を拝借しまして、長野県の医師確保対策のご紹介を頂き有難うございました。



地震を体験

『きみたち、お医者さんにならないか!』

盲導犬の体験

